岐阜経済大学論集 37 巻 1 号（2003 年）

ビッガー・トーマス（V・完）

――リチャード・ライトと人種関係――

安　部　大　成

まえがき
1　ビッガー・トーマスの特徴とその構築過程
2　ビッガー・トーマス
a.　メアリー・ドルトンの死まで　……（途中まで第 26 巻第 1 号）
（a 続き）　……（第 27 巻第 1 号）
a′. リチャード・ライトの影
b.　捜査関係者との対決　……（第 31 巻第 2・3 号）
b′. ライトと南部黒人文化　……（第 33 巻第 1 号）
c.〔良い白人〕：ジャンとマックス
c′. ライトと白人文化　……（以上本号）

2　ビッガー・トーマス〔承前〕

c.〔良い白人〕：ジャンとマックス

本稿（III）pp.85–86 において，ビッガーが，対立する人種関係を利用し，白人集団を出し抜く策として，探偵ブリトンにジャンの行動に関して虚偽の陳述を行った時，唖然とするジャンを目の前にして「体の奥底から熱い良心の呵責を感じ」るが，これは人種関係よりも人間関係の面で彼に対応するからだと指摘しておいた。

彼が再びジャンに直面するのは逮捕され勾留される身になった時である。拘置所の外には，白人女性を犯し殺害した黒人暴行魔をリンチにかけろ，と白人群衆が押しかけている。

司法機関の手で捕らわれたためにリンチは免れているが，死刑判決とその執行を免れることは先ず無いという状況にある。

死の前にキリストの愛と赦しの教えを受け入れ，これによって白人に対する憎しみを忘れ，永遠の生命を授かるようにと黒人牧師ハモンドがしきりに説くがビッガーは拒絶する。ビッガーの本心は彼が黒人男性として，白人女性に関連して人種差別を被って来たが故に，特に白人男性に対する憎悪と恐怖は捨て難く，彼等を赦し難いのだ。

「彼はメアリーを殺してしまう以前に，彼につきまとっていた牧師が説く人生像を心の中で潰してしまっていた。その行為が彼には最初の殺人のようなものであった。……彼を殺したがっていた者達にとっては，彼は人間ではなかった。神の創造絵図には彼は含まれてはいなかった。だから彼はそれを握り潰したのだ。」[1)]

供述書を取った後，検事バックレイーがビッガーを「ミシシッピー出のただの怯えた黒人少年だよ」と評したが，彼を脅かした者達，つまり「彼を殺したがっていた者達」とは，彼がシカゴへ移住するまでに暮らしたミシシッピー州の村や町で黒人として遭遇し，身に危険を覚えた白人達のことであろう。

シカゴで青春時代を迎えたビッガーが，その見聞や感触的体験を基に言う「彼を殺したがっていた者達」とは，彼がメアリーの寝室に入って直ちに出ようとしなかった時，彼がそこで身の危険を直感した者達のことなのである。

弁護士マックスがメアリーはビッガーを人間として受け入れてくれた人だと指摘した時，ビッガーは次のように言う。

「……自分に分かっていたことは，彼女のような女達が原因で彼等は私達を殺すということでした。……」[2)]

これを論理的に言えば次のようになる。

黒人男性を白人と同じ人間として受け入れる白人女性は黒人男性と個人的な人間関係を持つことにもなる。この白人女性と黒人男性との人間関係は，白人男性の多くの者に，関係を持つ黒人男性を憎悪させ，その生命を奪わせることにもなるから，このような女性が黒人男性を殺す誘因になる。

ビッガーの世代が生きた北部大都市の黒人社会は老若共に，その殆どが南部育ちであり，その南部では人種隔離制度が存在したが，その生活形態が農村風であり，黒人と白人との人と人との社会関係は北部大都市より身近であった。

ビッガーもライトも，この南部で『人種隔離実践の倫理』（*The Ethics of Living Jim Crow*）を身に付けてシカゴに移住したから，北部へ移住した後も北部の白人女性に，南部流に対応したのである。ライトはその当惑ぶりを『アメリカの飢え』で述べている[3)]。

黒人男性が白人女性を危険視するという，両人種集団の異性間の存在関係にあっては，白人女性が黒人男性に対して，その心的状況が無関心的であっても，黒人男性が白人女性に対して取るべき対応は二つある。これをAとBに分けて述べよう。

Aは受動的対応である。これには，白人女性に対し自己を非人格化して対応する，親密さを示すようないかなる態度も取らないというところから，白人女性を避けるところまで，その幅が広くある。

その典型の一つをライトは短編「ビッグ・ボーイ故郷を出る」において，子供の世界で描いている。

黒人少年達が樹木に囲まれた冷たい溜め池で泳いだ後，談笑しながらのどかに夏の日を浴び体を暖めている。

「『あっ！』

彼等は前方を見上げた。口は開いたままだった。

『あっ！』

向こうの土手の端のところに姿を見せたのだったが，帽子を手にして，日の光に髪を明るく輝かせて，白人の女の人が彼等の真向こうに立っているのだった。

『女の人だ』と息を殺してビッグ・ボーイがささやくように言った。

『白人の女の人だ』

……その女性は後ろにゆっくりとさがって行って，姿を消した。

『ここから逃げよう』とビッグ・ボーイはささやいた。

『あの女の人がいなくなるまで待とう』

……

『多分，男が一緒にいるぞ』

『おい，着る物を取って来よう』とビッグ・ボーイが言う。

……　短い草の房をつかまえて彼は土手をよじ登った。

『今出て行ったら駄目だ！』

『戻って来い，馬鹿だな！』

……

ボブが後に付いて登った。その女の人は25フィート離れたところに立っていた。

……

『戻って来るんだ，あの女の人は怖がっているぞ』とレスターが言った。」[4)]

Bは能動的対応である。黒人男性は彼と人間関係を持つ，あるいは持とうとする白人女性と危険を承知で，密かに親しい関係を持つのである。

この典型が『ボーイ』で語られているライトの叔母マギーの二度目の夫，マッシューズの行動である。

マッシューズは，進んで裕福な白人女性と密かに親密な関係を持つが，噂が流れて身に危険を覚えた彼が交際を絶とうするが，彼女は応じないどころか，別れるなら自分は犯されたと訴えてやると脅すようになる。

「白人の男達」による探索が始まり，身に危険を感じると，彼はこの女性を殴って失神させ，金を奪い，家に放火する。そして深夜，マギー叔母とライトの母が暮らす町へ逃げて来て，そのまま叔母を連れて北部へ脱出する[5)]。

ビッガーはこの二つの対応のいずれかを選ぶのではなく，Aである場合とBである場合の外にAとBとが混合するという対応ぶりを見せる。

ドルトン家に運転手で雇われ，メアリーを車に乗せて出かけ，ジャンも同乗してドライヴし，黒人街で酒を飲み，ジャンを途中で降ろし，ドルトン宅へ戻る。車の中で暫くメアリーと話す。彼はここまではAの対応をしている。

酔いが回って車の座席から一人で出られない彼女に求められて手を貸し，車外でふらつく彼女を支えているところからBになる。

夜に白人の女性とこうしているところを白人の男に見られたら，と思うと瞬時にAに戻る。

当初から彼を一人の人間として受け入れたメアリーという女性，彼を頼り

に困った状況から抜け出そうとする女性を支えていると，AとBとが入り交じって彼は困惑する。

彼女を抱えてその寝室に入るとAに戻るが，彼女が眠り込んでしまうとBに転じる。ドアが開く音がして彼女の母が入って来ると，瞬時にAに戻り，メアリーの口を塞ぐ。彼女の母が去った後，放心したようにBに戻る。そして彼女を気遣って様子を見ると窒息死している。驚いた彼はAに戻ろうとするのだが，メアリーはもはや生存していないから，戻りたくても戻れない。従ってビッガーはBを最後に，相手の女性が死亡し不在となる。

ビッガーはAとBとを行き来し，時にA，Bを混合させるが皮肉にもBの状態に戻った時，相手がこの世に居なくなる。

マッシューズの場合は，一貫してBである。彼は自分の生命を守るために，女性を殺害して相互の人間関係を終えると共に行方をくらます。

当時の南部では人種間結婚は法律で禁止されていただけでなく，白人女性が黒人男性と人間関係を持つことを白人社会は許さなかった。人種隔離がなされていたが，この社会的文化的統制を強固なものにするために，黒人男性の行動を監視し，統制に反する行動を取ったと疑っただけで，その男性を捕らえて密かに，あるいは公然と暴徒の手でリンチ刑に処して，黒人共同社会全体を恐怖に陥れ，また，黒人共同体でも，黒人男性と白人女性との人間関係が生命の危険を伴うものであるからこれを避けさせる方向で黒人男子を育てていった。この面を想定してライトの母が行った息子のしつけは，『ブラック・ボーイ』のいたるところに見られる。

南部白人男性による黒人男性のリンチ殺害事件を糾弾し，人権擁護のキャンペーンを行ったアイダB. ウエルズ－バーネットの報告書『リンチ殺害事件について』には，この規制の強固な南部社会で，白人女性が密かに黒人男性と親密な関係を持っていた事実と，白人男性による白人女性の殺害を黒人

男性による暴行殺人にすり替えて，黒人男性を焼き殺す事件などを報告している。

メアリーの白骨はこの報告書に見られるリンチの焼け跡に残った黒人男性達の白骨を逆説的に想起させる。

多くの白人男性が憎悪する，黒人男性と白人女性との人間関係の実例がかなり取り上げられているが，その内三つを簡単にまとめて取り上げて見よう[6)]。

1　テネシー州メンフィスのポプラ通りに住む若い白人女性が混血黒人と親しくなっていることが発覚した。激怒する女性の父から恋人を守るために，彼女は自宅から金を盗み出してこの男性に与え，シカゴへ逃亡させる。

彼が居なくなって事態が落ち着いた頃を見計らって，この女性も姿を消す。二人は北部の都市で合流したのであった。

2　人種混交罪で逮捕され，起訴されたテネシー州メンフィスの白人女性サラ・クラークは法廷で，彼女の家系に黒人の血統があるから自分は白人ではないと証言したため免訴となり，黒人男性との関係を継続する。

3　これは北部のオハイオ州クリーヴランドでの出来事だが，黒人男性と親しい関係を持っていた人妻が二人で居る現場を隣人に目撃された。スキャンダルを恐れた女性は関係を強要されたと訴えて出る。黒人男性は捕らえられる。彼は強要の事実を否定するが受け入れられず，婦女暴行罪で懲役13年の刑に服した。

歳月を経る内に，女性は良心の呵責に耐え兼ねて，このことの事実を夫に告白する。牧師である夫は驚愕するが，法の手続を取って，服役4年になる黒人男性を出所させ，彼は妻と別れてその地を去る。

後の二つは法の保護と裁きによるものであるから，黒人男性がリンチ殺害される最悪のケースを免れている。

三つに共通するのは，白人女性が黒人男性に対して誠実である点である。勿論黒人男性もそうであろう。

さて，ビッガーが黒人牧師の説くキリストの愛と赦しの教えを拒絶することは，黒人男性を一人間として受け入れる，言わば黒人男性を危険に陥れる白人女性の存在と表裏一体になっている。

彼が接した白人の多くの者達，それは明らかに男性であるが，彼等は黒人を神が創造した人間には含まれていないものと見なし，そのように考え，そのように行動している。この「彼を殺したがっていた者達」が存在する限り，神の創造に与からない者に，神の言葉を預かった人，死後神の力によって復活した救世主キリストの教えなど無縁だと言うのである。

ビッガーの前提となる論理は，それはライトにも通じるように思われるが，黒人男性であるビッガーを白人男性が対等の人間として認め，その結果，彼が白人女性と人間関係を持つことに人種的に敵意を持たない，つまり神の創造による同じ人間として認めるなら，彼は神の創造絵図に含まれることになり，従ってキリストの愛と赦しの教えをも受け入れ得る，と言うのである。

これはビッガーがメアリーを過失致死させた後，留置場でのジャン・アーロンとの対面の場で明確にされる。

「……ジャンの表情に怒りは見られなかった。……

『私は――私はね，私が怒ってはいないことを君に伝えたくてここへ来たのだよ。……君がこの事件の責任を私に負わせようとしたことで君を憎んでもいないよ……』」[7)]

「……『私はこの事件をあるがままに見ることによってそれに相応しい正しい生き方を試みたいから，ここへ来たのだよ。だがね，ビッガー，それも容易なことじゃないんだよ。私はね――私は君が殺したあの女性を愛していたのだ。私は――私は愛していた……』彼の声はとぎれ，唇が震えているのをビッガーは見た。……」[8)]

ジャンは，黒人奴隷制度によって多くの黒人が殺され，黒人がその苦しみに耐えたことを思えば，メアリーの悲惨な死に耐え得ると言う。

「『……お前を殺してやりたかった。そう思ったが，殺せば，この報復の殺し合いは繰り返され，終わることはなかろうと思ったのだ。それで自分に言ったのだ，「あいつがやらせてくれるなら，あいつを助けてやろうと」』」[9)]

ビッガーは，ジャンの言行にキリストの愛と赦しの教えが具現されるのを知った筈である。しかし，ライトはこれには触れない。彼はジャンにマルクス主義者の人間愛を具現させるつもりでいるからであろう。

黒人牧師の説教は効き目がない。しかし，白人青年がビッガーに自分の恋人を殺されても彼を憎まず，助けになりたいと言えば，愛と赦しの教えであれ人間愛であれ，ビッガーの胸を打つ。

「……彼には，生まれて初めて，一人の白人の男が一人間として立ち現れた。ジャンの人間性が真実のものであるという事実が後悔の思いとなって胸に突き刺さった。彼はこの男が愛したものを殺し，傷つけたのだ。……」[10)]

奴隷制度の下では，歴史の記録にある通り，白人男性によって，黒人男性は残酷に扱われ，抵抗するものは殺された。黒人女性は白人男性の性搾取の

対象となり，これによって人種が混交した。黒人女性を守ろうとする黒人男性は凄惨な目にあうか殺されるかのいずれかであった。

奴隷制度廃止後，黒人男性はその報復を試みて，白人男女を殺害しようとはしていない。黒人男女は白人と平等な権利を求め，その実現を求めて行動するが，報復を求めてはいない。

ジャンが言うような，報復の殺し合いも，報復の憎しみ合いなども存在しない。これを終わらせるために，ジャンがビッガーに対する憎悪や殺意を放棄し，逆に手助けすることで対処しようと決意しても，そのことでビッガーが胸を打たれることでもあるまい。

ライトがビッガーをして感動せしめたのは，作品の展開とビッガーのメアリーに対する心身の行動，ジャンに対する筋違いの感銘，マックスに対する矛盾した言動等々にも拘らず，その背後に読めるものとして，黒人男性と白人女性とが人間関係を持つのは人間本来の，自然に備わった資質であると当然視する白人男性をジャンに於いて発見したからである。

ビッガーを神の創造絵図に含めるには，彼を一人間として認識する，たった一人の白人男性が実在すれは事足りるのである。

メアリーが十字架に架かって死に，ジャンはこれに架かったまま生きている，という状況が生じる。しかし，この人種関係で生じる被害と加害，殺人と処刑という問題を受難の面で展開する作品ではないから，ハモンド牧師が乗り気でないビッガーの胸に掛けた木製の十字架には人間的な意味も宗教的な意義も生じない。

拘置所を取り囲んだ群衆の中にKKKの一団がいて，十字架を燃やす。これを目撃した機会にビッガーは胸の十字架をちぎり取って投げ捨てる。

白人至上主義団体KKKの正式名称はクリスチャン・ナイト・オブ・クー・クラックス・クランであるから，ビッガーの行為には黒人抑圧を標榜する白人キリスト教の騎士達の思想信条とその実践に対する拒否表明の意義はある。

さて，ビッガーとジャン，一黒人青年と一白人青年との間で，それはお互いに初めての体験であろうが，人種関係を越えた人間関係が成り立ったと言える。

出会って間もない白人女性メアリーとの間に成り立つことを求めて，不慮の出来事で破綻した人間関係は，そのパートナーであった白人男性ジャンとの間に成立するのである。

ライトがその自伝『ブラック・ボーイ』で述べた，彼自身が何時か何処かで巡り会うこともあろうとそれを強く望んでいた「良い白人」の一人と，ビッガーは劇的な事件の中で巡り会ったのだ。

ジャンが「良い白人」男性であることをビッガーがもっと早く知る機会があれば，このような白人男性がもう少し多く存在すれば，ビッグ・ボーイはやむをえず白人男性を射殺することはなかっただろうし，マッシューズが彼を愛した白人女性を焼き殺すことも，ビッガーが彼を一人間として受け入れたメアリーを過失によって死亡させることもなかっただろうということなのだ。

ビッガー・トーマスはジャン・アーロンとの間に成立した人間関係を基に，人種集団の単一メンバーとしてだけではなく，一人間として白人と対応するようになる。彼は人種関係の領域の外へ出たのである。

彼は州検事バックリーの尋問にも，弁護士マックスの事情聴取にも一黒人としてだけではなく，一人間として対応する。人種と人間が絡み合う複雑な心情に触れられると「無人地帯」に身を置きもするが，もはやかつてのビッガーではない。しかし，この人間関係の絆を基に対応するメアリーはもう居ない。それだけではない。新たな心で新たな女性と出会う機会もビッガーにはもはや無いのであった。

「良い白人」[11]を求めて北部に来たライトはシカゴでその男女に巡り会っ

た。それは，職場で親しくなった白人男性，作品の人物名ジャン・アーロンはこの人の姓を使ったようだが，アブラハム・アーロンに勧められて，1932年の秋，シカゴ・ジョン・リード倶楽部を訪ねた日のことであった。ここで彼は「良い白人男性」達に会い，次いで当然のこと「良い白人」女性達にも出会う。そしてその後数十年にわたって親しい間柄になる人々に出会った。これについては(III)の pp.64–66 で述べたが，この人達との出会いによってライトは創作活動の世界に入り，表現の世界で自己を生かすことが出来たのであった。

彼は言う。

「ビッガー・トーマスを私が見た通りに，また感じた通りに書かなかったら，彼を生きた人格として，また同時に，彼に感じ，彼に見たもっと大きな事柄を象徴するものとして描き上げようと努めなかったら，私もビッガーがなしたような反応をしたであろう。」[12)]

ライトはこの「良い白人」男女との出会いを率直に有り難く思っている。注目すべきは，これらの白人達の世界に入るには，先ずその世界につながる「良い白人男性」“a good White Man” に巡り会うことが前提であった。

〔注〕

1) Richard Wright, *Native Son* (A Perennial Classic, 1966), p.264.
2) *Ibid.*, p.324.
3) 拙稿「ビッガー・トーマス」(III),『岐阜経済大学論集』第 31 巻第 2・3 号, pp.61–64.
4) Richard Wright, “Big Boy Leaves Home”, *Uncle Tom's Children* (A Signet Book, 1963), pp.26, 27.
5) Richard Wright, *Black Boy* (A Signet Book, 1968), pp.74, 75, 76, 77, 78. 前掲拙稿(IV),『岐阜経済大学論集』第 33 巻第 1 号，pp.104–106 参照。
6) Ida B. Wells-Barnett, *On Lynchings* (Arno Press and The New York Times, 1967), pp.7, 8.

7） *Ibid.*, p.266.
8） *Ibid.*, pp.267, 268.
9） *Ibid.*, p.268.
10） *Ibid.*, p.268.
11） ライトは "good White people" という表現をしている。*Black Boy*, p.163.
ウォレンは "good white people", "white persons", "a good White man" という表現をしている。Robert Penn Warren, *Who Speaks for the Negro?* (Random House, 1965), p.201.
男と女を分けるときライトもウォレンも "a White woman" と書いているが，"a good White woman" という表現に筆者は未だ出会っていない。
12） Richard Wright, "How Bigger Was Born", *Native Son* (A Perennial Classic, 1966), pp.xxi–xxii.

c′. ライトと白人文化

ライトは「良い白人男性」をこの作品で生かすことにしたようである。この面を見よう。

「『ビッガー』はどのようにして生まれたか」に於いてライトは『息子』創作に当たって，ロバート・ニクソン事件がその素材になっている事を述べている。

この事件は1938年5月27日，シカゴで二児の母である白人女性フローレンス・ジョンソンが家宅侵入した十八歳の黒人少年，ロバート・ニクソンによって煉瓦で殴り殺されるという明白な殺人事件であった。

被害者が白人女性で，加害者が黒人男性である場合は，物的証拠が無くとも，婦女暴行殺人と決め付ける人種偏見が存在する。

この少年は警察の取り調べでこの女性を犯したという供述を強いられ，これが連日，白人女性凌辱事件として，ラジオ・新聞によって扇情的に報道され，白人社会の反黒人感情を煽った

ライトは『息子』で，白人社会の黒人差別が生んだ黒人極貧層の生活状態と，黒人男性と白人女性との関係を憎悪する人種偏見的感情を，ビッガー・

トーマスの行動を通して取り上げるところであったから，このニクソン事件は出版予定の作品に利用されることになった。

ニクソン事件の裁判は7月の後半に行われ，8月に死刑の判決が下り，翌年1939年8月に刑が執行される。

この間，公正な裁判と人権の保護を求めてシカゴ黒人社会の指導層が立ち上がり，全国黒人会議はニクソンに黒人弁護士と訴訟費用を提供し，支援した。

マーガレット・ウオッカーはニューヨーク在住のライトに求められて，その間1カ年近く，ニクソン事件の記事をシカゴの五つの日刊新聞から切り取って彼に送り続けることになる[1)]。

事件発生は5月の下旬，初回公判7月下旬，8月に入って間もなく死刑判決が下るが，その1年後の処刑の日まで，黒人社会と共に全国黒人会議，全国黒人地位向上協会はニクソンとこの事件の公正な扱いを求めて活動し，ウオッカーはその間，1カ近く精力的に事件に関する記事を送り続ける。ところが事件後5カ月，死刑判決後2カ月余り経った10月24日に，ライトは『息子』の初回の草稿を完成していた。

この草稿はライトの友人で共産党の指導的人物ハーバート・ニュートンの妻，ジェーン・ニュートンが目を通し，彼女と熱心に意見を交わしながらニュートンのアパートで完成されていったのだが[2)]，彼は草稿の成り行きについてもこの進歩的な白人夫妻の協力についてもウオッカーには何も伝えなかった。

作品をより現実的なものにするためにライトは11月に入ってシカゴを訪れる。そして，ウオッカーと連れ立って，ニクソンが収監されているクック郡拘置所，ドルトン家の住所に使う空き地などビッガーが行動する場面となる場所や建物を見て回る。

「ライトは新しい本のことについて少しだけ説明して，記事の切抜きにつ

いて話をした。横9フィート縦12フィートの寝室の床に記事を敷きつめて，ドライザーが『アメリカの悲劇』でやったように記事を利用しているのだよと彼は言った。彼はこれらの記事をすっかり広げて，何度も何度も読み返して，それから彼の構想力をもって飛び立つのでしょう。」[3)]

ウオッカーは彼女が送った記事の切抜きが大いに役立ち，作品はライト一人の手で執筆されていると思い込んでいたようである。

『息子』では労働者の権利を守る組織「労働防衛者」が白人弁護士マックスを送り込むことになっている。これはニクソン事件で国際労働防衛（International Labor Defense）が白人弁護士ジョセフ・ロスを派遣した事実を基にしている。

しかし，見逃してはならない事実は，ロスの活動は初めの段階に過ぎず，しかもその役割も取るに足らないものであったということである[4)]。

実質的な弁護活動は全国黒人会議が派遣した黒人弁護士ユリシーズ・キーズとその後全国黒人地位向上協会が送った弁護士とによって行われている。

この事からライトもウオッカーと連れ立ってキーズの事務所を訪ね，彼に会っている。その際ウオッカーがライトに，作品に利用するためにキーズから訴訟事件摘要書を貰っておくように勧めたが，ライトは彼女の目をじっと見つめるだけで，それには応じなかった[5)]。

彼は最初から，ビッガーの弁護士に黒人を当てる考えは全くなかったようである。

彼は翌日ウオッカーを誘って市の図書館に出向き，クレアランス・ダロウが扱ったレオブ－レオポルド事件に関する書物と彼に関する書物を彼女の図書カードを使って借り出し，ニューヨークに持ち帰る。

ダロウはアメリカでも著名な白人法律家で，黒人の権利を擁護する論陣を張り，その弁護活動を行った。中でもシカゴの黒人政治家オスカー・ディプ

リーストが起訴された警察官贈賄事件の弁護を担当し，無罪を勝ち取ったことで黒人社会にもその名が知られている[6]。

ライトはニクソン事件の公判記録も利用するが，黒人弁護士の活動をすっかり無視して，弁護士を白人に設定し，これを黒人被告の擁護者に当てるには，黒人に取っても現実味のある，著名なダロウの活動を知る必要があったようである。

「ライトに影響力を及ぼしたものはすべてが白人世界のものである。……はっきり言うと黒人達は決して彼の理想的な人間ではなかった。彼は黒人が求める目標を実現するために戦ったが，黒人を理想的なものとして描いたり，これに光彩を与えることは決してなかった。」[7]

とウオッカーは昔を振り返って言う。

彼はシカゴ警察の鎮圧に抗してデモ隊を鼓舞する黒人党員デヴィッド・ポインドクスター，白人の党指導者ハーバート・ニュートンの勇気と弁舌に感激する。そして間もなく両者と親しい友人となる。

著名な党の活動家であるポインドクスターはライトと同郷のミシシッピー州の出で，長らくその地で船荷運搬作業員として働き，北部へ移住して来た人だった[8]。

しかし，ライトは白人党員ジャン・アーロンを理想像として描いても，黒人をそのように扱うことはなかった。

ライトは『合衆国に於ける黒人文学』(1957) に於いて，黒人詩人の作品を歴史的に辿り，これに批評を加える中で，黒人が黒人としてではなく，一人間として作品を書く時代の再来を求めているが，彼はそこで，黒人の理想的な在り方を述べている。

彼は良い白人との出会いを求め，これを個人的に実現したが，彼が提示する黒人の理想的な在り方は，黒人に対する白人側の態度如何によって定まる性質のものである。従って黒人側が，この理想的な在り方を主体的に創出することは困難であると考えていることが明らかになる。

これについて『アメリカ黒人詩集』初版の序文（1921）で黒人の詩と詩人について批評したジェイムス・ウエルドン・ジョンソンの見解と比較して検討して見よう。

ジョンソンは黒人には二つの人種・民族的才能があると見ている。一つは民族集団が有する適応能力であり，もう一つは特性とも言うべき文化移入能力である。これが個々の作家に具現されると彼は考える。

「黒人は異郷に暮らすことになっても，その地で生活を営む中で，その国の精神文化の傾向を吸収して，そこに人心に訴える何か普遍的なものを含む独特の芸術なるものを創造する能力」[9)]

がある。これは

「適応能力という注目に値する人種・民族的才能に由来する。いや，この才能は適応能力以上のものであって，文化移入能力とも言うべき特性」[10)]

を持っているからであると彼は考える。

彼は，フランスの作家アレキザンドラ・デューマが旧フランス領西インド諸島出の黒人を父に持ち，ロシアの作家アレキザンダー・プーシキンの曾祖父がアフリカ人であったにも拘らず，この人種面が取り沙汰されたり，妨げになったりはせずに，フランス，ロシアの文化の中で育ち，社会に統合されていってフランス人，ロシア人として，その国を代表する作家になったの

は，この二つの能力に負うところが大きいと見る。

合衆国にはおびただしい数の黒人が存在するが，デューマやプーシキンのような作家が出ないのは何故か。

それは奴隷制度とその後の人種差別が原因となっていることは言うまでもないが，これには言及しないで，1920年代の黒人知識人として，彼は次のように言う。

「この質問は答えるのが難しそうに思えるが，一つの答えはある。合衆国の黒人は，疲れてへとへとになる程の人種抗争によってその知的エネルギーをすっかり消耗しているからである。」[11)]

ではライトはどのように考えるのだろうか。

彼は黒人及び黒人作家とその社会との関係を「帰属体としての個人」と「実体としての文化」との関係でとらえる。

彼にとってアメリカの「実体としての文化」は白人文化であって，決して黒人文化ではない。

おそらく彼はジェイムス・ウエルドン・ジョンソンのこの「序文」から得るところが多かったであろうと思われる。

彼はその出典名を伏せて，アメリカ黒人の体験外の場面を紹介し，

「これを黒人が書いたのだろうか？ どうやら黒色人種のものではなさそうだ。これはアレキザンダー・デューマの『モンテ・クリスト伯』の一節なのだ。アメリカの社会的人種規定によれば，彼は黒人であることは事実なのであるが，彼に関して言えば，彼が黒人であることは大して重要な事ではないのだ。」[12)]

その理由として，彼は，デューマが暮らした時期のフランス社会の良さを語る。

彼は「統合」，「同化」という用語をよく使用するので，彼が言う文化的同化による人種統合とは具体的にどのような事態を指すのか，また「黒人」デューマが「黒人」であることが大して重要でなかったのは何故かを，彼の素朴で実直な考えをすっかり引用して見てみよう。

「何故か？ それは彼が暮らす社会から彼を分け隔てする法律も習慣も存在しなかったからである。行きたい学校，行きたい教会には何処でも行けた。就きたい職には何でも就けた。住みたいところは何処でも住めた。結婚したければ誰とでも出来た。決意と才能があって，それを望めば名声も得られた。彼は彼がその中で暮らした文化と一体であった。だから彼はその時代の人々と共有した希望と期待を基にして作品を書いたのであった。」[13)]

ライトのような作家がこのような，ナイーヴな考えを披露するのに接すると，白人社会が黒人に加える人種抑圧の下で生きていった一人間としてのライトの心境に触れることが出来るような感がする。

「デューマはフランスの文化と一体になっていたのであった。だから彼は一フランス人であったのだと言える。」[14)]

彼はプーシキンをその作品の一節と共に，黒人であるよりもむしろロシア人であったロシア黒人として紹介する。

そして，この二人がそれぞれの国，社会の文化と一体であった，即ち「実体としての文化」と「帰属体としての個人」とが合体していて，その間を隔てる距離がなかった典型であると言う。

彼はプーシキンについて，それはデューマの作品についても言いたいことであろうが，

「彼の作品にはアメリカ黒人の作品に見られる身を刺すような，荒々しい憎悪，欲求不満，むかつきのいかなる響きも見られない。」[15)]

と言う。

ライトは「実体としての文化」である白人文化と「帰属体としての個人」である黒人との間の距離が短かければそれだけ黒人には理想的な在り方であり，対立的な感情が発生する度合いもそれだけ少ないと考える。

彼はジョンソンより20年後に世に出た作家であるだけではなく，アメリカ黒人文学を白人文学界の庇護から解き放ち，これを独り立ちさせた作家として高く評価される人物である。

だからジョンソンが言うような，合衆国にはデューマとプーシキンに匹敵する作家が出ないとは言わない。

「これまでにアメリカ黒人の誰かがデューマやプーシキンのように作品を書いたことがあったであろうか。あったのだ。一人。唯一人だけ。

……

1761年のある日，アフリカからアメリカへと恐ろしい船旅をして来たのだが，一隻の奴隷船がボストン港に錨を下ろした。

……いつもの通り競りが行われた。……最後に，か弱い十二歳の黒人少女だけが売れ残った。……だが，ホイットレイという名のボストンの仕立て屋がこの子供を買って家に連れ帰り，ホイットレイの妻の使用人として仕付けをした。」[16)]

一，二行で書けることをわざわざ引用したのは，ライトが本気になって，

このアフリカ人少女――1753年頃の生れと推測され，当時七，八歳であったとする説が多い――が，デューマやプーシキンがフランス社会やロシア社会に統合されたように，奴隷制度を容認するアメリカの文化に同化し，その社会に一アメリカ人として統合されたと主張していることをはっきりと示したいからである。

「この名前のない黒人の子供はフィリスという名前を貰い，家族の一員としてホイットレイの家庭に受け入れられ，ホイットレイ家の他の子供とすべて同じ権利を得た。」[17)]

ホイットレイ家に受け入れられると，この家族がその切っても切れない一部分であるボストン社会に受け入れられることになる。ボストン社会は当時のアメリカ13州植民地という言わば一国家の一部であり，フィリスは奴隷身分なので，ボストン市民でありアメリカ市民であるとは言い難いから，ボストン人であり，アメリカ人だとライトは言いたいのである。

「ホイットレイ家に緊密に結ばれていたので，彼女はそこで暮らしたキリスト教地域社会の情感を吸収し，家庭，学校，教会という観点から考えて見ても，この国の文化を共有したのである。」[18)]

ライトはホイットレイ家の文化，ボストン文化，アメリカ文化を「実体としての文化」とし，「帰属体としての個人」であるフィリスをアフリカ人，または黒人として記述するが，彼は「実体としての文化」が黒人奴隷制度を容認する文化である事実と，「帰属体としての個人」であるフィリスは，文化同化の産物である詩集を出版する年の1773年まではホイットレイ家が身分解放をしなかったので，奴隷であったという事実には言及しない。

「彼女の詩には彼女が黒人であるとかアフリカ生れであるとかを示す痕跡は殆ど見当たらない。実際彼女はアメリカの情熱と希望と一体化していたので，1776年の戦争時にジョージ・ワシントンに関する詩を書いた。彼女はワシントンの軍司令部に招かれ，我が建国の父は彼女の詩の表現を称えたのである。」[19)]

ライトは彼女の才能の開花とその作品を，基本的には彼女の白人家庭ホイットレイ家との統合及びボストン白人文化との同化の所産と見る。そしてフィリス・ホイットレイにアメリカ黒人作家の理想的な在り方の典型を見るのである。

ジョンソンはこの優れた黒人女性詩人をどのように見るのであろうか。

彼は，人種抗争によって知的エネルギーを消耗してはいるが，アメリカ黒人も文学の領域で偉業を成し遂げているとし，その代表作としてW.E.B.デュ・ボイスの『黒人の魂』(1903) を掲げている。そして，これに先立つ業績リストを掲げる中で最初に位する黒人作家として詩人のフィリス・ホイットレイを挙げる。

ここで注目したいのは，黒人詩人フィリスと白人社会及び白人文化との関係をジョンソンがどのように見ているかである。

彼は，フィリスは滅多に故郷の事も奴隷制度の事も詠まないと評する。

「彼女の詩のどこかに奴隷制度に対する憤慨や不平すら，また苦悩に満ちた望郷の叫びを，探し求めても無駄である。」[20)]

この見解に於いては，彼はライトとさほど距たってはいない。しかし，ジョンソンのこの批評は詩の表現法を言うのであって，その内容ではない。アフリカ人を蔑みの目で見る白人キリスト教社会を柔らかく，皮肉るように

批判する詩「アフリカからアメリカへ連れて来られて」と，故郷で娘を奪われて嘆く両親の胸の内を思い，奴隷制度を非難する詩「ダートマス伯に捧ぐ」が存在するが，ジョンソンはこの二つの詩について簡単な批評を行う。

前者には異教徒の地「アフリカから逃れ出た安堵感が詩の情感の下に漂っているように感じられる。」[21]と評し，後者には「彼女を奪われた両親に関する言及には，その冷静さの方がむしろ読者の胸を打つ」[22]とする。

彼はフィリスが，特に上記の詩に於いては，もっとはっきりと，率直に批判と悲憤の情感を打ち出すべきであったと残念がっている。

「フィリス・ホイットレイが為すべきことをしなかったのは彼女が受けた教育とその環境による。彼女の心は古典文学に染まっていた。また彼女の詩形は古典派と神話学上の引喩に満ちていた。……また彼女はボストンの裕福で教養ある家族に保護されて育てられた。だから，彼女は人生というものを知る機会が無かった。彼女は人生と自分の周囲の状況とが自分自身と本当はどんな関係にあるのか，それを見つけることが出来なかったのだ。」[23]

彼の見解を，ライトの「実体としての文化」と「帰属体としての個人」との観点で言えば，フィリスの文化との帰属の仕方が現実と真実から多分に遊離したものであったということである。

しかし，ジョンソンはフィリス・ホイットレイを，これまでにアメリカが評価して来た以上の作家として高く評価している。

1945年に出版されたセイント・クレア，ホラスR.クレイトン共著『黒人大都会』(1945) の序文を書いたライトは，時代を経るに連れて白人社会が黒人を，かつて一人の黒人奴隷少女フィリスを受け入れたようには，平等な関係で受け入れなくなっているから，黒人は白人社会に対してクロード・マッ

ケイの詩にあるような，敵対的態度を取るようになり，遂には白人ヴァチェル・リンゼイの目から見ても，黒人は彼等を受け入れてくれない白人社会に対して絶望的になっていると，二人の黒人と一人の白人の詩を使って，白人社会に訴えた。

ライトはマッケイを黒人作家の中で，最も「実体としての文化」に離反した「帰属体としての個人」と見ている。つまり，ライトの目から見ると最も理想に反する在り方なのである。

「……1920年代，人種憎悪が狂乱の頂点に達し，その後のきしむような圧迫の歴史の中で，黒人の心は冷酷なものになり，別の黒人，クロード・マッケイが新たに奇異な声を上げるのを耳にするようになる。」[24)]

彼はマッケイのソネット，「若し我々が死なねばならないのなら」を取り上げて言う。

「文体の明快な詩歌で『壁に押しつけられ』，反撃に『命取りの一撃』を加えよと，牙をむいてうなるように歌わせるなんて，一体アメリカはこの人々に何を為出かしたのだろうか。これは『黒ん坊（ネガーズ）達を熟知しているから，奴等に何が相応しいかも分かっている』という300年にわたる政策の結果なのか。……アメリカには何か間違いがあるということを否定するのは馬鹿だけだろう。」[25)]

マッケイの『白人の家』は，ホイットレイ家とライトの論評を思い浮かべて読むと，象徴的である。

白人の戸口の扉が黒人の顔面で閉ざされる。憤懣で顔は堅くなり，心は鋼鉄のように鋭くなる。だが，黒人には誇りをもって，頑として，怒りに耐え

る勇気と潔さがある，とマッケイは詠む。

「私達はフィリス・ホイットレイの無垢な心から遠く，遠く離れている。クロード・マッケイは反逆者であると言うのは控え目な言い方である。反逆が彼の生き方なのである。」[26)]

ジョンソンはアフリカを離れて異郷に暮らすなかで発展させた黒人特有の能力を高く評価し，この面で黒人作家を見ていることは既述した。彼の，マッケイの「若し我々が死なねばならないのなら」に対する評価を見よう。

「これは強力で率直で，精悍な詩である。生気を律動させて，行動へと活気づける。マッケイの抗議と反逆の詩を読むと，この詩人が『燃える胸』で行うように，故郷ジャマイカを夢見て歌い，また『ハーレムの踊り子』，『ニューハンプシャーの春』，その他多くの詩で為すように，詩の無上の美しさを創出するなど想像するのも容易ではない。反逆の詩に見られる情熱は，質を変えて，彼の愛の叙情詩に表現されるのである。」[27)]

彼はマッケイを能力と幅の広さと才能の三つを兼ね備えた詩人として評価し，その深い能力と熟達した才能をもって幅広く詩を詠み，人種問題の局面にのみ制約されることの無い点を高く評価した[28)]。

黒人であることで，その人生が白人に対する反逆に尽きることはあるまい。

白人文化と黒人個人との間が離反状態になると，個人がそのまま自己憎悪状態に陥るとライトは考えるようである。『アメリカの飢え』（1944）で，彼は言う。

「黒い肌の色に対する嫌悪は黒人の社会生活を白人の社会生活の下位に位置づける。白人と同じ理想に反応を示す黒人は，この肌の色の違いを知っていて，そのことで寂しく，心配になるから，これを心の中で葬り去ろうと骨を折る。白人に嫌われ，その上黒人を嫌う文化の生きた一部分でもあるから，黒人は，白人が嫌っているものを嫌うようになる。」[29)]

ライトはこのように，すべての黒人が，白人の嫌う黒い肌の自己を嫌悪するようになると，前提事項を曖昧にしたまま論理を展開する。

ライトは白人と黒人の人種関係を越えた人間関係を求めた人である。そして「悪い白人」という言葉は使わなかったが，その種の白人を極力避けて「良い白人」を求め続け，数は多くはないにしても，遂にその人達を見つけてその仲間に入った人である。

この人達は黒人をその身体特徴をもって見る人達ではなかった。だからその意味でも黒人の身体特徴を嫌悪したり，また愛好したわけでもあるまい。彼等は黒人を嫌悪する白人達と，あるテーマに関して理想を共有し，その他ではそうしないであろう。

ライトは詩人ホイットレイの在り方を理想とし，マッケイのそれを理想的な在り方から程遠いものとした。それどころか，ライトの論理からすれば，黒人は反逆の力さえ失って死んでいると判断し，「彼等は死ぬのではなく，彼等は羊のように死ぬのだ」と彼の判断を，白人詩人ヴァチェル・リンゼイの詩に委ねている[30)]。

彼はソビエト・ロシアが誕生したことによって，白人労働者と黒人労働者が国際的に手をつなぎ，労働者の世界を築くところに，新しい形の人種統合を夢見たこともあった[31)]。

「フィリス・ホイットレイは我が国の父ジョージ・ワシントンの司令部を訪問した。ところで，ラングストン・ヒューズはソ連の父，レーニンを訪問

したのだった！」[32)]

彼はその当時，他国の労働者というよりも白人労働者との一体感から，黒い手が白人労働者の白い拳と並んで差し上げられるのを見ると歌った。だが，今はそのように，ナイーヴではないという。

第二次世界大戦後，世界の指導権を巡ってソ連とアメリカ合衆国との対立は激しくなる。アメリカは対外的にも，国内問題としても黒人問題の解決が迫られる。

1954年5月，最高裁判所が人種別公立学校制度を憲法違反とする判決を出し，公共教育の場で人種平等の原理による人種統合の道が開かれた時，ライトは，これだけが主要なものとは言えないが，これがアメリカのものの見方に変化をもたらすと予測した。そしてこの種の国家による人種統合が黒人文学という表現の世界に影響を及ぼすと考えた。

「当然の事アメリカ国家側からの黒人融合同化の努力は黒人の文学表現に影響を及ぼしている。……国家の黒人に対する対応が変われば，黒人の文学表現の様式と傾向には直ぐ変化が現れる。黒人がアメリカ生活の主流に合流するにつれて，黒人文学といったようなものは結果的に無くなってしまうかも知れない。」[33)]

彼はここから「実体としての文化」と「帰属体としての個人」との関係，彼の論旨を基に言い換えれば，「実体としての『白人』文化」と「帰属体としての『黒人』個人」との関係を，「アメリカ国家の対黒人政策」と「全体としての黒人」へと変転させている。アメリカが国家の政策として黒人問題の解決に乗り出したことの効果を大きく評価したようである。

では白人の中にいる「良い白人」，白人文化の中にある人間を尊重する文

化を彼はどのように見るのだろう。彼は前者「良い白人」をリベラルと呼び，後者をリベラルな考えと呼ぶ。そして，これまでの黒人の文学的表現とリベラルな考えとの関係を次のように規定する。

「黒人というものはリベラルな考えを持つ人達の多くに取っては一種の良心の問題として存在する。リベラル達は罪悪感に悩まされていたから，黒人が嘆き悲しむとこのリベラル達が黒人の実情とアメリカ社会の現実との関係を説明する上で，役立つものがあった。」[34)]

ところが，政府の統合政策の影響によって，黒人は白人リベラルに黒人として依存しなくなり，一人間として，その考えを主張するという新たな態度を持つようになった，と彼は見る。そして，次のように楽観的な結論を出す。

「やっとのことなのだが，恐らく黒人の文学表現とアメリカ文学の表現とが合体することになるだろう。」[35)]

しかし，黒人が黒人としてではなく，一人間，一アメリカ人として自己を表現できるかどうかは，実は白人の黒人に対する態度に依存することを再確認することになる。

「アメリカ黒人の表現が人種をテーマとする方向へと急カーブを切ることになると，我々は，白人隣人達の手で，昔ながらの苦しみを味わっている印となるであろう。」[36)]

合衆国政府が行った統合政策に白人社会が積極的には応じなかったことは周知の通りである。

彼はアメリカ国家の政策に触れたが，人種隔離の壁を崩す上で官憲の鎮圧，保守的な白人勢力の圧迫に抗して戦った黒人共同社会の老若男女達，黒人運動団体のことには何一つ触れなかった。彼は公民権運動が高揚する1960年代を目の前に，1960年フランスのパリで他界した。

リチャード・ライトは，アメリカの白・黒両人種関係から生じる諸問題はサットン・グリッグズに見られるような民族主義的人種分離主義では勿論なく，ラングストン・ヒューズを典型とする現実的な人種・民族文化複合主義をも避け，かたくなに文化同化主義に依拠して，白人と黒人との統合を求めた。その実現には黒人を一人間として受け入れる「良い白人」，白人「リベラル」が不可欠だっだ。だから，彼には黒人よりも，このような白人の方が意義があり，価値があり，魅力があり，大事なのであった。

（完）

〔注〕

1） Margaret Walker Alexander, “Rchard Wright”, Ray and Farnsworth, ed., *Richard Wright* (The University of Michigan Press, 1973), p.59.

2） Michel Fabre, *The Unfinished Quest of Richard Wright* (William Morrow and Company, Inc., 1973), pp.169–174.

3） *Ibid.*, p.60.

4） Keneth Kinnamon, *The Emergence of Richard Wright* (University of Illinois, 1972), p.125.

5） Walker, *op.cit.*, pp.60–61.

6） St. Clair Drake and Horace R. Cayton, ed., *Black Metropolis*, Vol.I (Harper & Row, Publishers, 1962), p.365.

7） Walker, *op.cit.*, p.65.

8） Fabre, *op.cit.*, pp.90, 107.

9） James Weldon Johnson, ed., *The Book of American Negro Poetry* (Harcourt, Brace & World, INC., 1959), p.20.

10） *Ibid.*, p.20.

11） *Ibid.*, p.21.

12） Richard Wright, “The Literature of the Negro in the United States”, *White Man Listen!* (Anchor Books, 1957), p.73.

13) *Ibid.*, pp.73–74.

14) *Ibid.*, p.74.

15) *Ibid.*, p.74.

16) Wright, *op. cit.*, p.75.

17) *Ibid.*, p.75.

18) *Ibid.*, p.76.

19) *Ibid.*, p.76

20) Johnson, *op. cit.*, p.28.

21) *Ibid.*, pp.28–29.

22) *Ibid.*, pp.28–29 とする。

23) *Ibid.*, p.31.

24) Richard Wright, "Introduction", St. Clair Drake and Horace R. Cayton, ed., *Black Metropolis*, Vol.I (Harper & Row, Publishers, 1962), p.xxxiii.

25) *Ibid.*, p.xxxiv.

26) Richard Wright, "The Literature of the Negro in the United States", *White Man Listen!* p.96.

27) Johnson, *op. cit.*, p.167.

28) *Ibid.*, pp.43–44.

29) Richard Wright, *American Hunger* (Perennial Library, 1977), p. 6.

30) Richard Wright, "Introduction", St. Clare Drake and Horace R. Cayton, Vol.I (Harper & Row, Publishers, 1962), p.xxxiv.

31) これについては前掲拙稿「ビッガー・トーマス」(IV), pp.95–96.

32) Richard Wright, "The Literature of the Negro in the United States", *White Man Listen!* p.99.

33) *Ibid.*, p.104.

34) *Ibid.*, p.104.

35) *Ibid.*, p.105.

36) *Ibid.*, p.105.

〔訂 正〕

第33巻第1号, 本稿(IV), p.93, p.95

『アンクル・トムの小屋』→『アンクル・トムの子供達』